

河北町畑中（一の坪）遺跡出土の墨書土器

渡辺和行

1 はじめに

河北町は山形県の中央やや東寄りに位置し、南に寒河江川が流れ、東に最上川が流れる。町の南東に寒河江川と最上川の合流地点があり合流後に北へと流れる。周辺市町村は南に寒河江市、東に天童市、北に村山市が位置する。

今回取り上げる畑中（一の坪）遺跡は河北町の中央やや南に位置している。カッコ書きで一の坪遺跡とあるが、畑中遺跡と一の坪遺跡は別の遺跡であり、対象としている墨書土器は一の坪遺跡から出土したとされている。この中に「大山郷」・「大山」と書かれた墨書土器があるとされ、それをもって河北町を古代の行政区画である村山郡大山郷にあてる説がある。

2021年度に開催した、山形県埋蔵文化財センターの巡回展示に伴ってこれらの遺物に携わった。その中で報告書に掲載されていない遺物があることを知った。貴重な資料であることからそれらを含めた37点に関して実測図の作成を行ったものである。その上で、文字や土器、出土地点について若干の再検討を行った。本論はその結果をまとめたものである。実測図は第2図から第6図まで掲載しており、高台坪、壺、坪、蓋の順で掲載している。その上で器種ごとに残存率が高いもの、次いで型的に古いであろう順で並べている。また、残存率の高いものは復元実測を行い、文字が見える部分の平面図を作成し、底部側であれば実測図の下側に、蓋など上面に位置しているものは上部に配置している。残存率の低いものは文字が書かれた部分の平面図のみを作成している。いずれの場合も実測図の右側に赤外線スキャナーで読み込んだ画像を添付し、その下に注記と判読した文字を掲載している。文字は不明なものを□で表しており、可能性のある文字は文字のあとに「？」をつけている。そのほかに、第7図「申」を墨書された土器をまとめたもの、第8図「子□」をまとめたもの、第9図「大山」関連とその検討に使

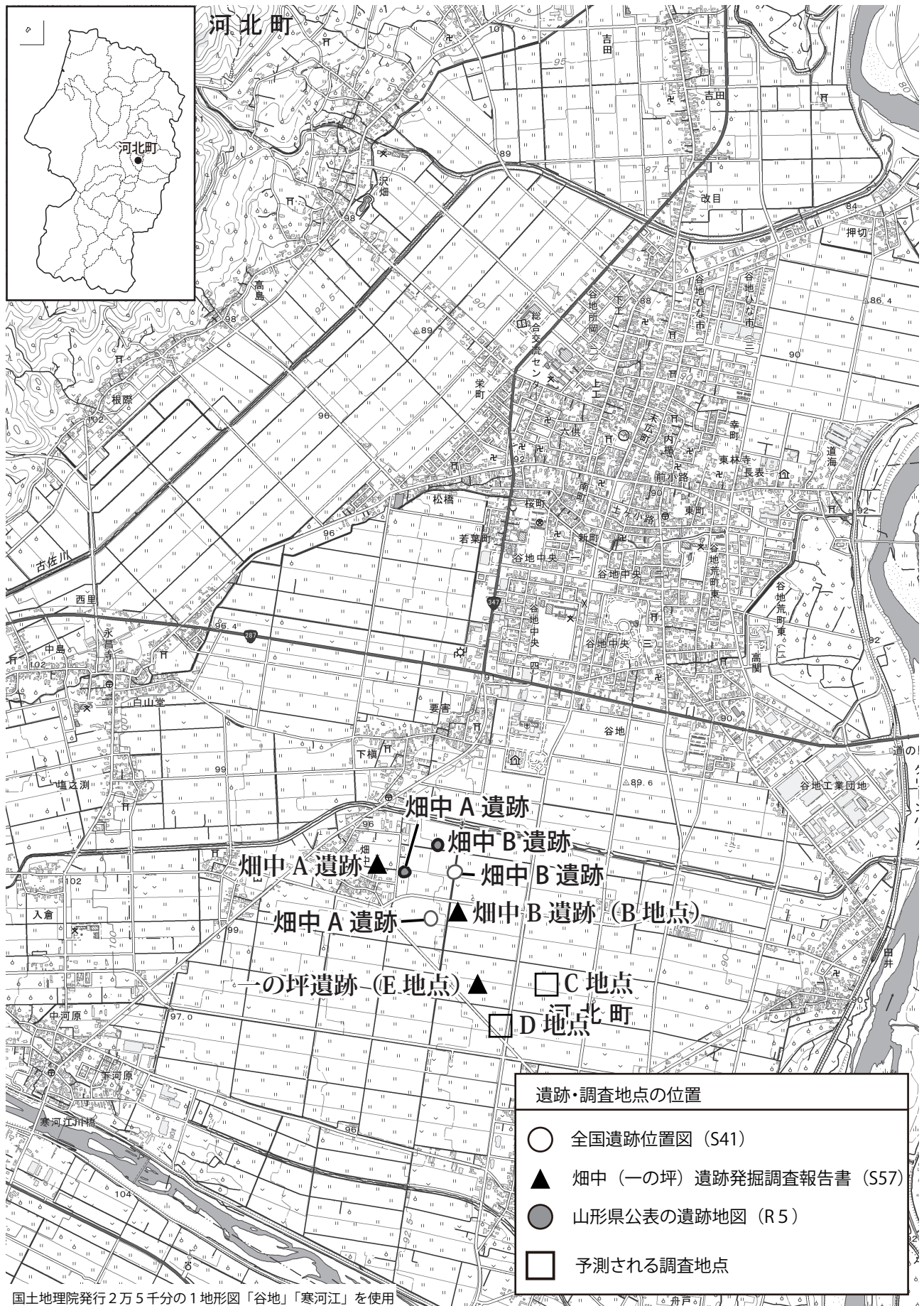
用した「万」の異体字をまとめたものを掲載している。

なお、一部の墨書土器について国立歴史民俗博物館の三上喜孝氏に見解を頂いている。遺物については河北町教育委員会所蔵であり、貸出をして頂いた上で実測図の作成及び墨書を赤外線スキャナーで読み込んでいる。また、第2図1・7、第4図16に関しては、河北町教育委員会に承諾の上で水浸けし、墨書の判読を行った。

2 出土地点

まず、墨書土器の出土地点について確認を行う。昭和56年発行の発掘調査報告書によれば、畑中B遺跡の調査を行ったとされる。畑中B遺跡では2×10mのトレンチを6か所設定したが遺構は確認されず、永楽通宝1枚と土器片3点が出土した。一の坪遺跡は畑中B遺跡の南200mに位置し、その土地の通称である一の坪を遺跡名として付したようである。調査を行った各遺跡及び地点に対してアルファベットを付している。確認されるアルファベットはB～Eである。調査を行った順序はB→E→C→Dの順に行ったものとみられる。なお、B地点が畑中B遺跡でE地点が一の坪遺跡、C地点が一の坪遺跡の南側排水溝から東方約300mの地点、D地点がこのC地点から南西約200mの微高地にあたる。C地点では2×10mのトレンチを数か所、D地点では2×10mのトレンチを10か所設定して調査を行っている。面的な調査ではないため、これらが同一集落か別集落かまた遺跡として分かれるのかどうかの判断は難しい。この様な状況から、本論では遺跡名ではなく地点名で検討を行うこととする。

さらに、一の坪遺跡とされている遺跡が山形県が公表している遺跡地図に記載がない。また、畑中遺跡の位置も報告書掲載のものと山形県が公表している遺跡地図では異なっている。二つの地図の遺跡位置を地図上で落とすと第1図のようになる。さらには昭和41年に作成された全国遺跡地図に載る位置とも若干の違う。



第 1 図 各遺跡位置図による位置の違いと各調査地点

どういった経緯でこのような違いが現れたのかは不明である。だがどの場所においても古代に関する何らかの痕跡が確認出来ているためだと思われる。なお第1図には実際に調査を行った河北町教育委員会が作成した遺跡位置図を元としてC地点、D地点を検査し載せている。こういった状況も含め、付近に熊野台遺跡や不動木遺跡^{ゆするぎ}があることから谷地の市街地から寒河江川や最上川にいたる平野部に未発見の遺跡が数多く存在していることが想定できる。

遺跡の位置や大まかな調査箇所や状況について確認できたところで、次に出土地点をもう少し詳しく確認していく。報告書によると合計41点の墨書土器が出土し、その内36点はC地点から出土しているという。出土遺構は状況から流水溝と考えられている。山形県内で墨書土器を出土する遺構で多く見られるのは河川跡や溝跡である。C地点での出土状況はそれに合致する。その他の5点については出土地点の記載がない。そこで注記の確認を行った。注記は「CKHHN-C20」のように書かれている。ここから検討すると「CKHHN」が河北町と遺跡名を表し、ハイフン後のCが地点名、その後ろの数値が地点に対する出土遺物番号と考えられる。これを前提に、各遺物を確認したところ今回実測した37点の内、C地点から出土したものは32点、D地点2点、E地点3点ということになる。このことから、今回実測を行っていない4点の出土地点はC地点と分かる。なお、3点は報告書第11図に載るC-23B・C-27・C-7である。また、D地点とE地点から出土した墨書土器は出土遺構の記載がない。ただ、D地点は微高地に存在し竪穴建物や土坑が検出されており、E地点でも竪穴建物などが検出されていることから生活空間に近い場所と考えられる。地点の状況から詳しい出土遺構は分からずとも地点によって性格が異なるため墨書土器の持つ意味合いは変わってくると考えられる。一方でE地点で出土した第4図20とC地点で出土した第2図1、第6図34の上から2文字は同様の文字ではないかと三上氏からご教示頂いている。このことからE地点とC地点では共通の文字を書く関係性を想定出来る。

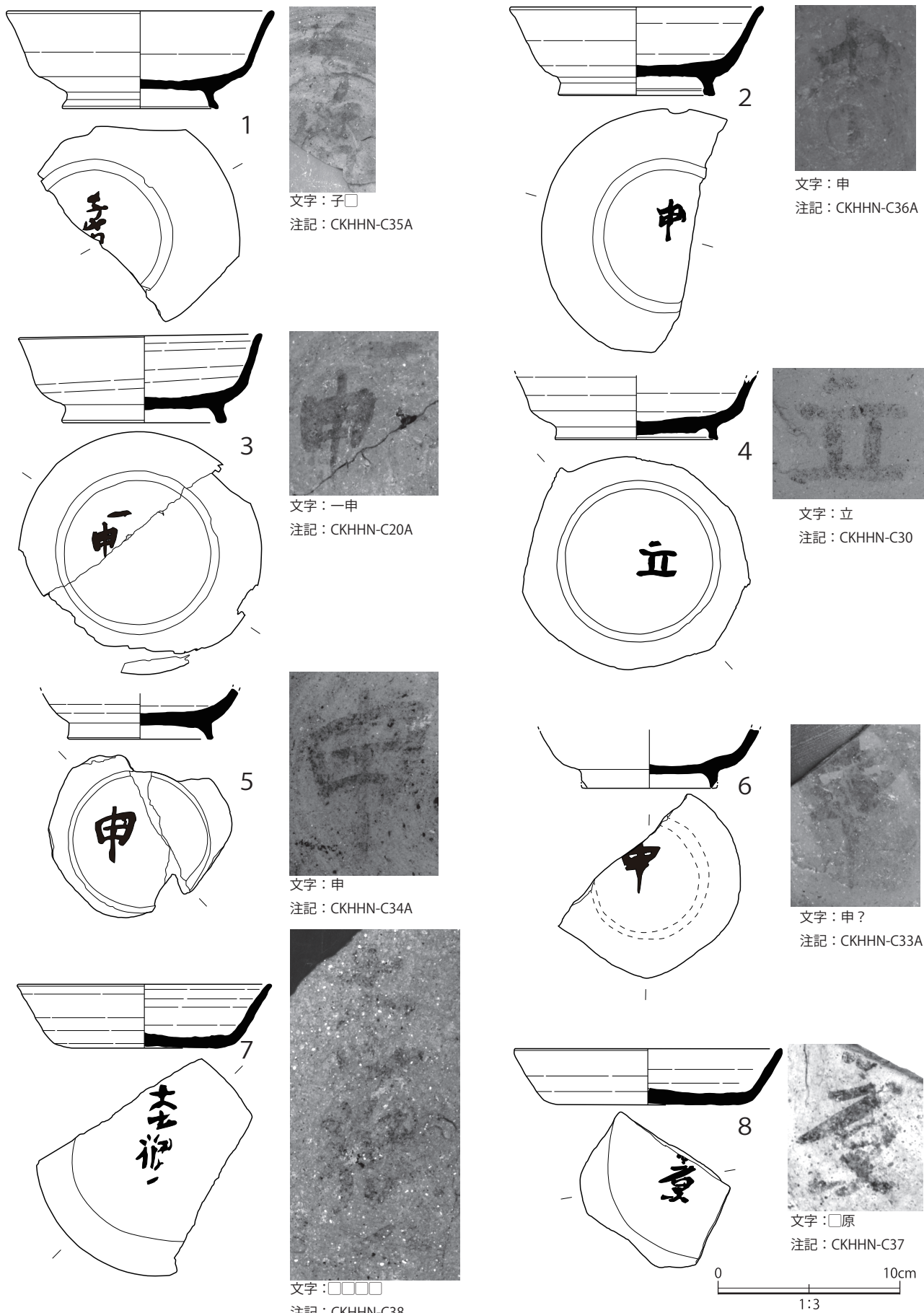
なお、共通する文字は「子□」で、□内は福や酒などが考えられるが判読が難しく今の段階では不明としている。これらは第8図に実測図をまとめている。

3 文字種と器形・年代

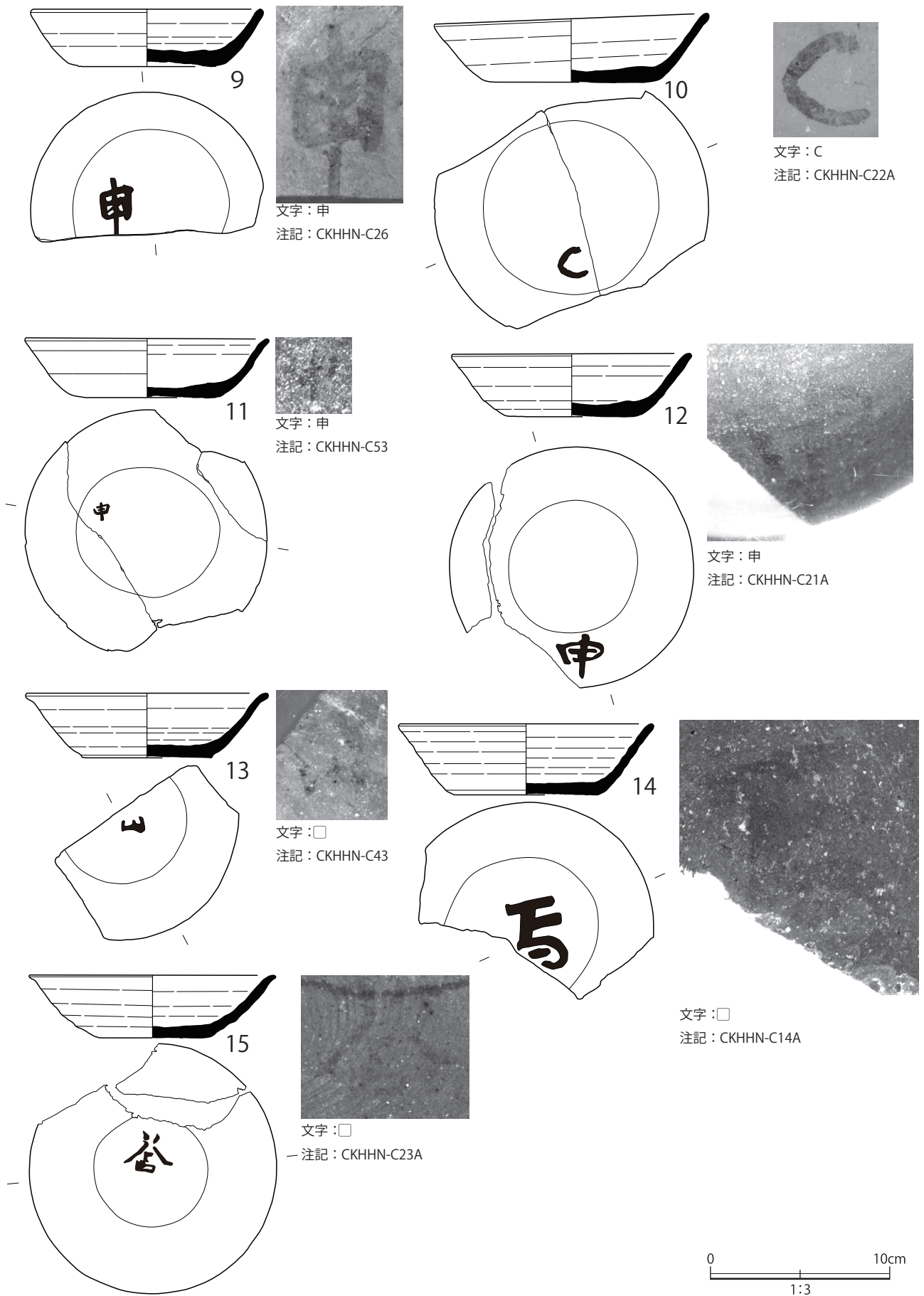
今回実測した墨書土器は全て須恵器である。墨書の文字で一番多くみられた文字は「申」である。恐らくそうであろうと思われるものも含めると14点が確認出来る。次いで「子□」が2点、他は1点ずつである。1点ずつのものは「子□人」、「一申」、「□申」、「田□」、「立」、「□原」、「C」、「畚」、「上」、「伯?」、「迫?」、「万（異体字）」、「舎」や判読不明の1文字のもの、4文字のものがみられる。

点数の多い「申」の検討を行う。器種は、高台坏・壺・坏・蓋に書かれており、特定の器種に書かれているわけではない。土器の製作年代は底部切り離し調整が回転ヘラ切のものから回転糸切のものまであり、8世紀後葉から9世紀前半までの年代幅で考えられよう。墨書は高台坏、壺や坏で底部外面に書かれており、体部に書かれているのは第3図12のみで文字は逆位で書かれている。蓋については外面上部に書かれている。これらの傾向は他の墨書土器も同様であり、文字の違いはあるが土器の製作時期や文字の書かれた場所に共通性が見られる。なお、体部に文字が書かれたものに第5図の31・33がある。この2点は底部の切り離しが回転糸切で、底部から斜め上方向へ直線的に作り出す器形のものであり、9世紀前半でも新しい時期に製作された遺物と考えられる。一方で第3図12は回転糸切での切り離して底部からの立ち上がり若干内側に入り、その後斜め上方向へ直線的に立ち上げている器形である。底部と口径の差が回転ヘラ切の第3図11と近いこともあり製作年代は9世紀初頭と考えられる。墨書される位置は新しい年代になると体部外面に書くという傾向がみられる。この3点は製作時期に差が考えられるが文字を書かれたのは近い時期であった可能性がある。

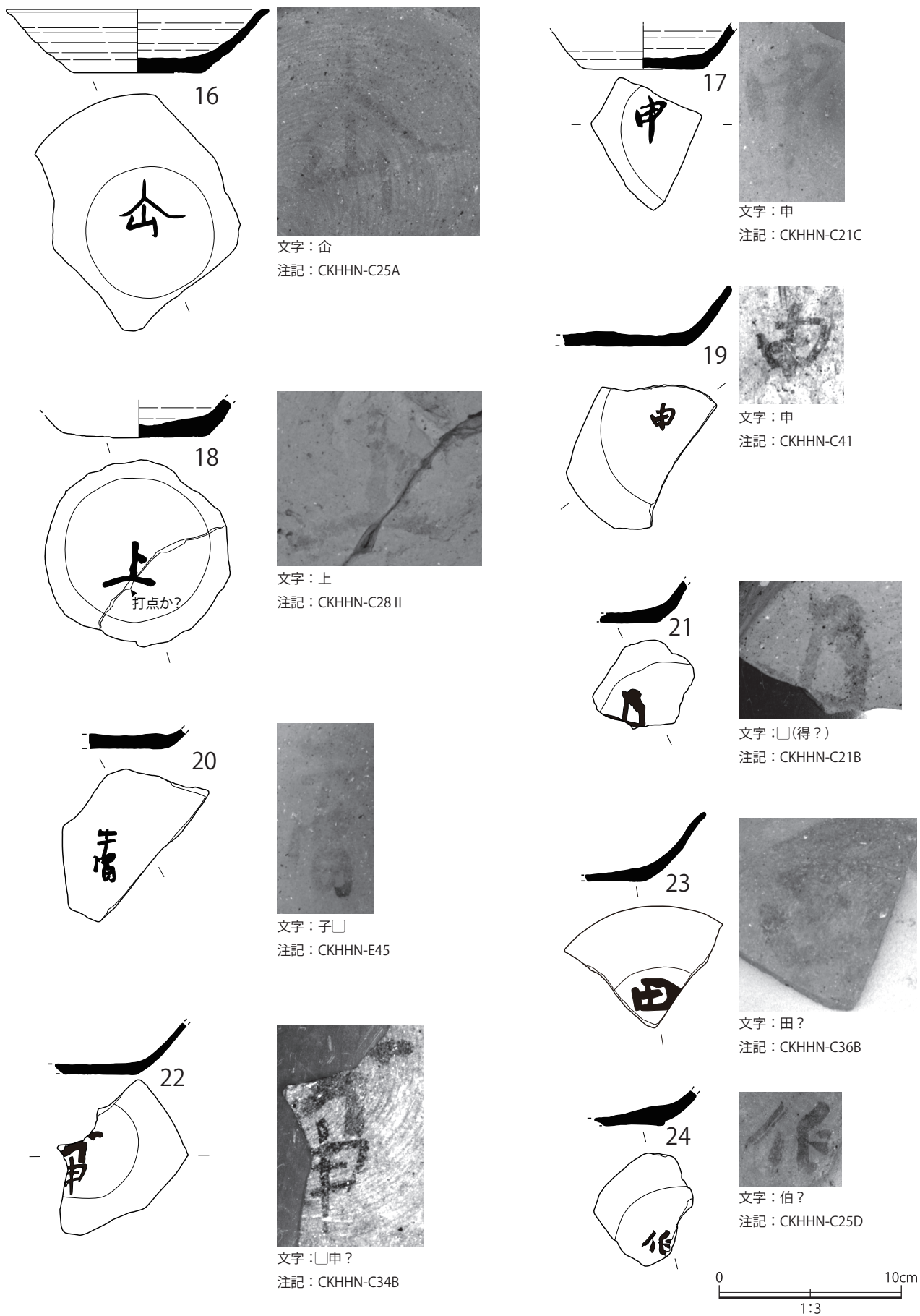
ここまで、器形に対する年代観と文字が書かれた場所を確認したが、先ほど示したように文字が書かれた時期は土器の製作時期と必ずしも一致するとは限らない。廃棄時に書かれたのか、使用されているときに書かれたのか、こういったことでも墨書土器の持つ意味合いは変わってくるといえよう。文字の書かれた時期については文字の大きさと判断出来る場合も想定される。墨書土器を研究した平川氏によると文字の大きさ



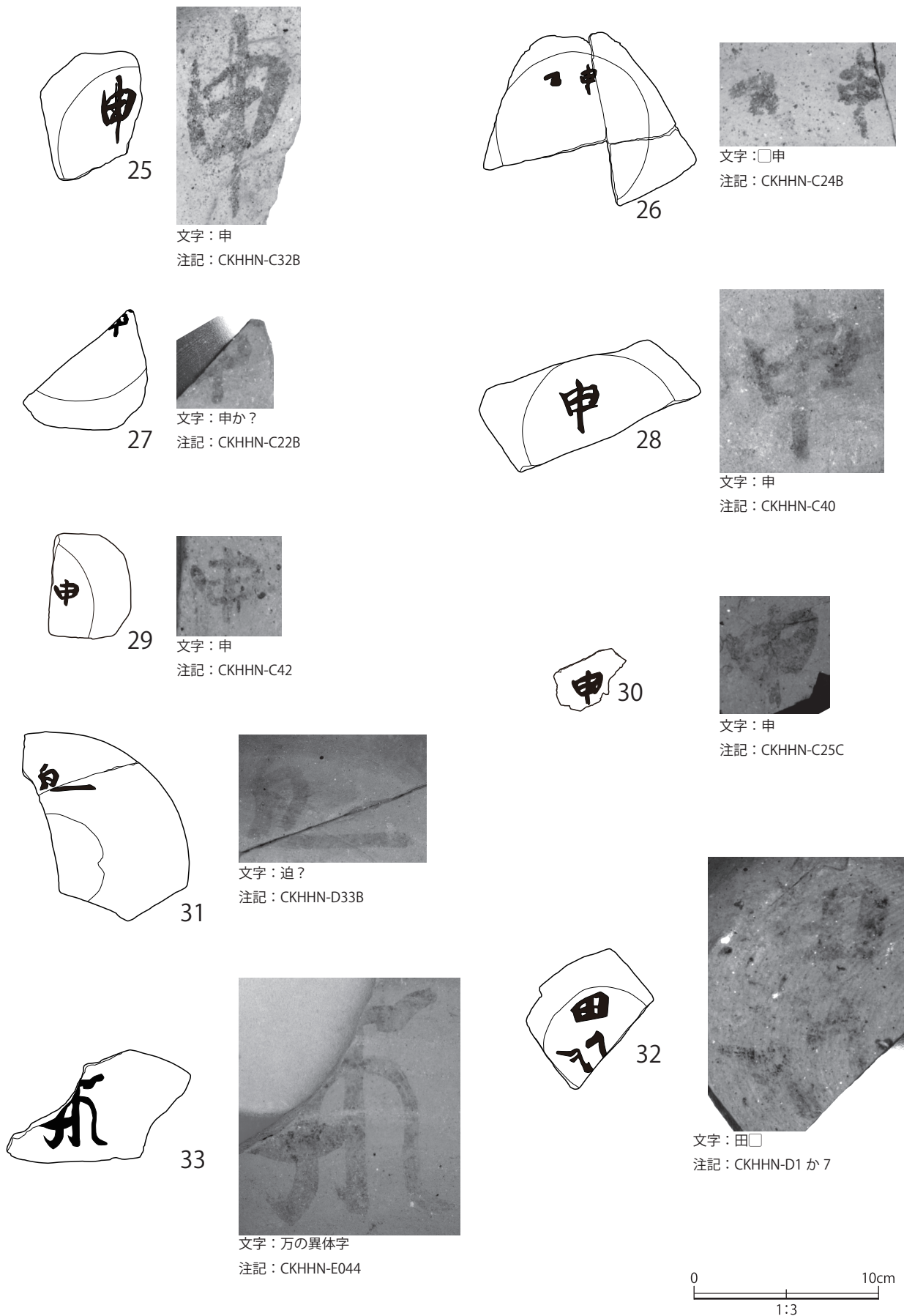
第 2 図 畑中（一の坪）遺跡出土の墨書土器 1



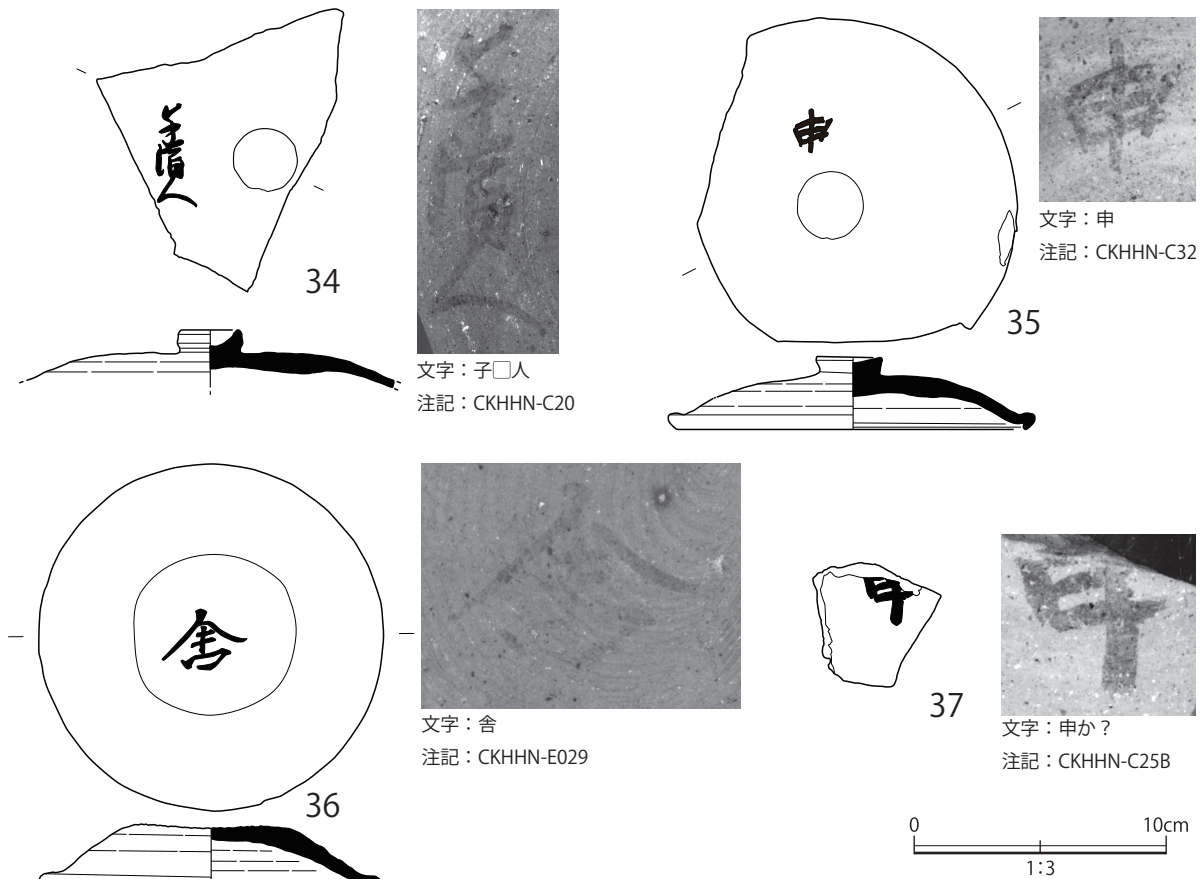
第3図 畑中（一の坪）遺跡出土の墨書土器2



第 4 図 畑中 (一の坪) 遺跡出土の墨書土器 3



第5図 畑中（一の坪）遺跡出土の墨書土器4



第 6 図 畑中 (一の坪) 遺跡出土の墨書土器 5

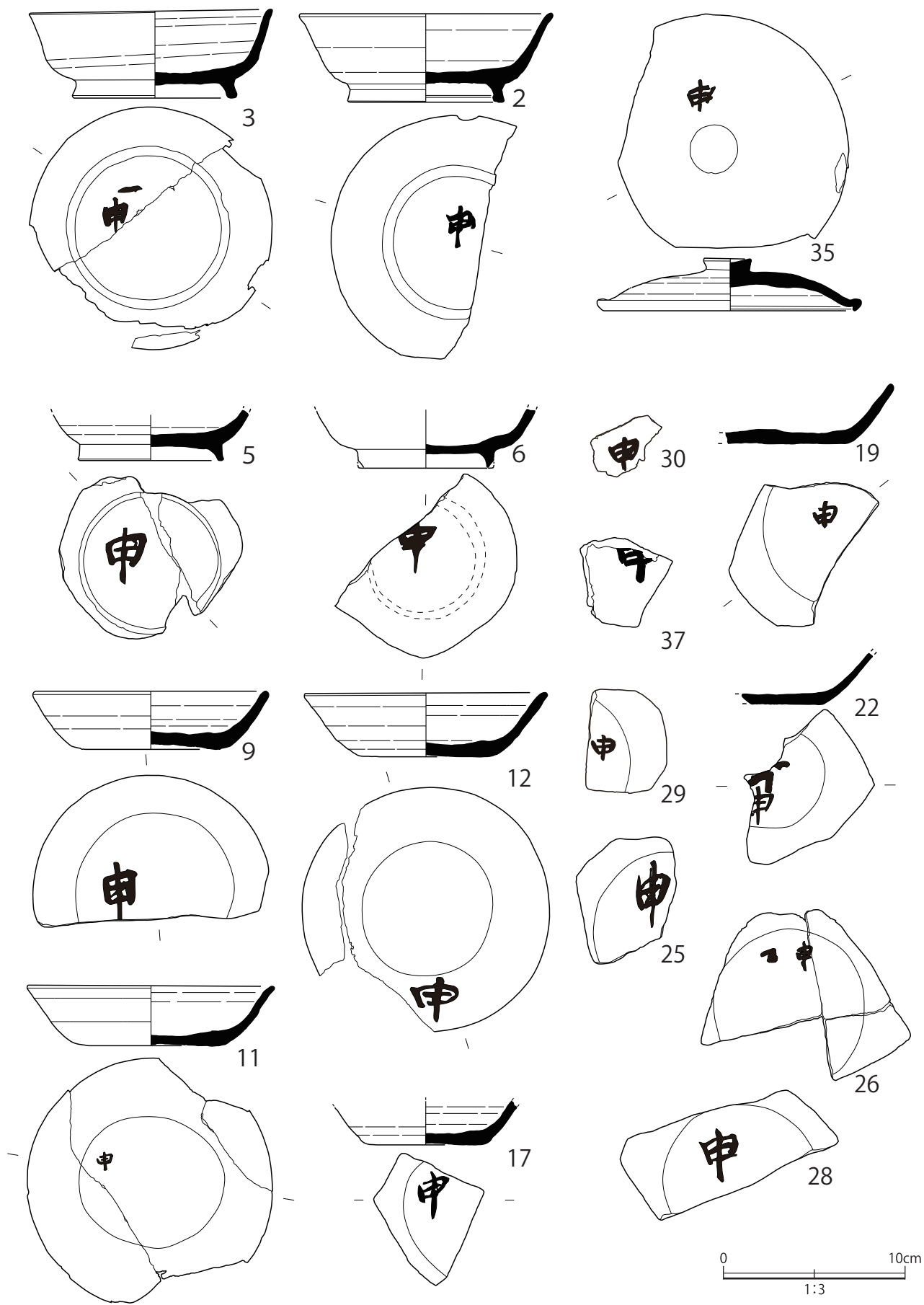
は、墨書土器の絶対数が少なく、しかも墨書内容の種類が少ない場合に小さく書かれ、墨書土器が爆発的に盛行し、絶対数および墨書内容の種類が多岐にわたるに伴い大きく記される傾向にあるということである。そのことを踏まえ対象遺物を確認すると比較的小さい文字が書かれているのは第 2 図 1・3・7・8、第 3 図 10・11、第 4 図 19・20、第 5 図 29・30、第 6 図 34・35 である。この中には複数文字のものも含まれるが一文字辺りの大きさを判断している。また、一文字の大きさが破損によりはっきり分からないものや不明瞭なもの、判断に窮するものは含んでいない。これらを見ると第 6 図 35 以外は全て底部の切り離しが回転ヘラ切であることがわかる。第 6 図 35 については器種が蓋であり、切り離し調整が明確に判断できなかった。底部切り離しが回転糸切のものに書かれた文字は全て大きい。こういったことから文字の大きさに対しての時期差をこの遺跡では想定することが出来よう。また、回転ヘラ切のものであっても大きい文字が書かれているものもある。文字が書かれた時期差で考えるならば土器の使用期間についても検討が可能になりうる。さ

らに出土地点や層位も含めた検討を行うことにより廃棄時期を検討することが可能になるのではと考える。なお、先ほどの字の大きさに関する抽出は主観にて行っている。本来であれば底径に対して文字が占める割合や文字そのものの大きさの計測が必要であろう。

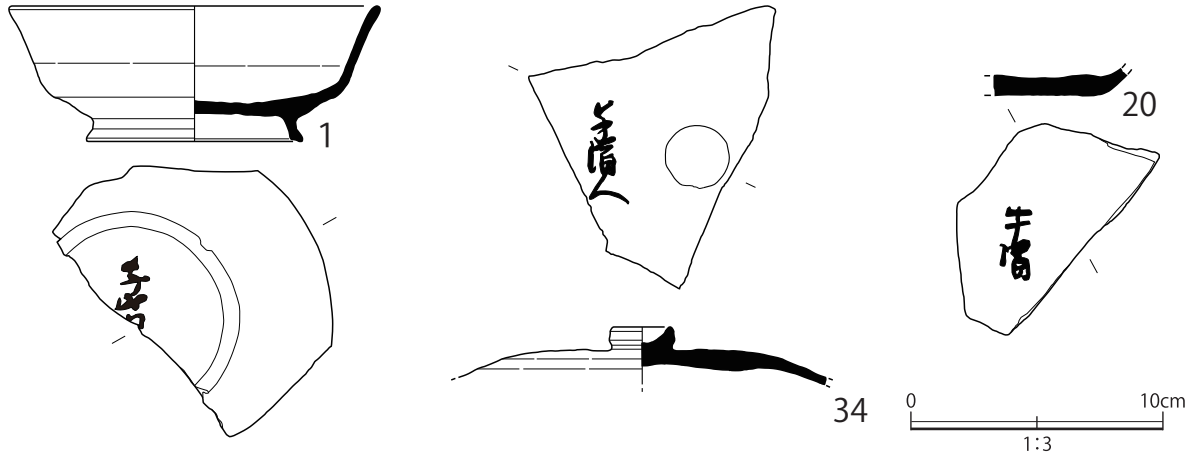
以上の点からここまでをまとめると対象とした墨書土器は須恵器に墨書され、書かれた土器は 8 世紀後葉から 9 世紀前半に製作された土器であり、墨書はその文字の大きさから少なくとも 2 時期に分かれて書かれていることが考えられる。また少なくとも「申」という文字は 2 時期ともに共通して書かれており、他の文字との差別化が考えられる。以上ここまでで 4 つのことが指摘できる。

4 「大山」墨書土器について

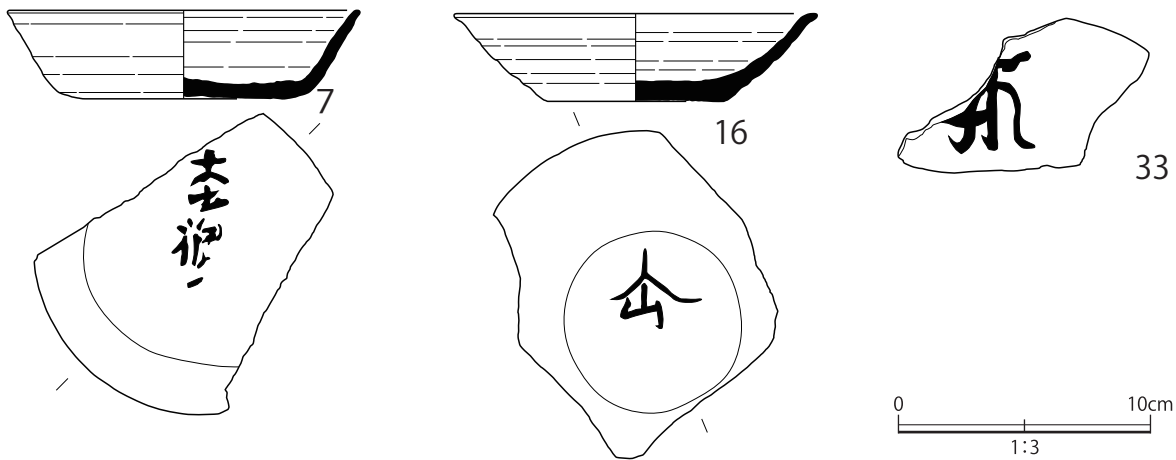
一の坪遺跡出土の墨書土器には「大山」・「大山郷」と書かれている墨書土器があり、それをもって現河北町域を古代の行政区画である「大山郷」にあたるとする説が存在する。大山郷は倭名類聚抄によると村山郡に含まれている。村山郡は和二年に最上郡から分郡



第7図 墨書土器「申」集成



第 7 図 「子口」関連墨書土器



第 8 図 「大山」関連墨書土器

され設置された郡である。仁和二年は西暦で 886 年であり、9 世紀末に近い。対象とした墨書土器の年代観からすると村山郡が設置される以前に製作された土器ばかりである。「大山郷」という文字が書かれていた場合、土器の廃棄年代や文字が書かれた時期の問題もあるが村山郡の分郡以前に大山郷が存在していた可能性が高いことを指摘でき、このことは最上郡内の地域開発状況を検討する資料ともなりうる。

このような重要な要素をもつ墨書土器であるが、報告書の段階ではそのことに対して触れられていない。この土器の存在が示されたのは 1982 年の河北町教育委員会から発行の「月山堂遺跡発掘調査報告書」であり、「山形県史 1」には写真付で紹介されている。そこで示された土器について次に確認と検討を行う。

第 8 図に大山という文字として紹介された墨書土器をまとめている。7 は 4 文字が確認出来る。しかし、墨痕が薄く肉眼及び赤外線スキャナー、水漬けでの判

読も行ったが明確に文字を読み取ることは出来なかった。かろうじて一文字目が「大」と見えなくもない。三上氏によると「丈」の可能性も考えられるということである。報告書作成段階では、もう少し判読可能な状態であった可能性もある。もう一方の 16 は報告書の段階で横棒がない状態で掲載されている。しかし、その後刊行された山形県史やうきたむ風土記の丘考古資料館の開館 20 周年記念企画展の図録などには「大山」として紹介されている。まず報告書に記載された字体であるが、一般的になじみのない文字である。この墨書土器も、7 と同様の方法で文字の確認を行った。しかし、「大」の横棒は明確に確認できず報告書にのる字形であることが確認出来た。この字を三上氏に見て頂いたところ、第 8 図 33 の「万」の異体字と考えられる文字の存在から、この字も異体字である可能性があり、「尪」ではないかとご教示頂いた。この文字は仏典に載る文字の辞書として執筆された「^{がん}竜龕手鑑」に載

表1 墨書土器観察表

番号	注記No.	種別	器種	推定年代	文字	墨書の部位	備考
1	CKHHN-C 35 A	須恵器	高台坏	8世紀後葉	子□	底部	回転ヘラ切、作りが丁寧
2	CKHHN-C 36 A	須恵器	高台坏	8世紀後葉	申	底部	回転ヘラ切、打ち欠きか？
3	CKHHN-C 20 A	須恵器	高台坏	8世紀後葉	一申	底部	回転ヘラ切、打ち欠きか？
4	CKHHN-C 30	須恵器	高台坏	8世紀後葉	立	底部	回転ヘラ切、焼成不良
5	CKHHN-C 34 A	須恵器	壺底部？	9世紀前半	申	底部	回転糸切
6	CKHHN-C 33 A	須恵器	壺底部？	8世紀後葉	□（申？）	底部	回転ヘラ切、文字が綺麗
7	CKHHN-C 38	須恵器	坏	8世紀後葉	□□□	底部	回転ヘラ切
8	CKHHN-C 37	須恵器	坏	8世紀後葉	□原	底部	回転ヘラ切、焼成不良
9	CKHHN-C 26	須恵器	坏	8世紀後葉～9世紀初頭	申	底部	回転ヘラ切
10	CKHHN-C 22 A	須恵器	坏	8世紀後葉～9世紀初頭	C	底部	回転ヘラ切、打ち欠きか？
11	CKHHN-C 53	須恵器	坏	8世紀後葉～9世紀初頭	申	底部	回転ヘラ切
12	CKHHN-C 21 A	須恵器	坏	9世紀初頭	申	体部外面	回転ヘラ切
13	CKHHN-C 43	須恵器	坏	9世紀前半	□	底部	回転糸切
14	CKHHN-C 14 A	須恵器	坏	9世紀初頭	□	底部	回転ヘラ切
15	CKHHN-C 23 A	須恵器	坏	9世紀前半	□	底部	回転糸切
16	CKHHN-C 25 A	須恵器	坏	9世紀前半	尙	底部	回転糸切
17	CKHHN-C 21 C	須恵器	坏	9世紀初頭	申	底部	回転ヘラ切
18	CKHHN-C 28 II	須恵器	坏？	9世紀初頭	上	底部	回転ヘラ切、器壁厚く雑な作り
19	CKHHN-C 41	須恵器	坏	8世紀後葉	申	底部	回転ヘラ切、底部に敷物の痕跡が残る。
20	CKHHN-E 45	須恵器	坏	8世紀後葉から9世紀初頭	子□	底部	回転ヘラ切
21	CKHHN-C 21 B	須恵器	坏	8世紀後葉から9世紀初頭	□（得？）	底部	回転ヘラ切
22	CKHHN-C 34 B	須恵器	坏	9世紀前半	□□（申？）	底部	回転糸切、文字の線が細い
23	CKHHN-C 36 B	須恵器	坏	9世紀前半	田？	底部	回転糸切
24	CKHHN-C 25 D	須恵器	坏	9世紀前半	伯？	底部	回転糸切、焼成不良
25	CKHHN-C 32 B	須恵器	坏	8世紀後葉から9世紀初頭	申	底部	回転ヘラ切、文字が綺麗
26	CKHHN-C-24 B	須恵器	坏	8世紀後葉から9世紀初頭	□申	底部	回転ヘラ切、焼成不良。
27	CKHHN-C 22 B	須恵器	坏	8世紀後葉から9世紀初頭	□（申？）	底部	回転ヘラ切
28	CKHHN-C 40	須恵器	坏	8世紀後葉から9世紀初頭	申	底部	回転ヘラ切、焼成不良
29	CKHHN-C 42	須恵器	坏	8世紀後葉から9世紀初頭	申	底部	回転ヘラ切、焼成やや不良
30	CKHHN-C-25 C	須恵器	坏？	8世紀後葉から9世紀初頭	申	底部	回転ヘラ切、器壁が薄い
31	CKHHN-D 33 B	須恵器	坏	9世紀前半	迫？	体部外面	回転糸切
32	CKHHN-D 1 か7	須恵器	坏	9世紀前半	田？□	底部	回転糸切
33	CKHHN-E 044	須恵器	坏	9世紀前半	万（異体字）	体部外面	
34	CKHHN-C 20	須恵器	蓋	8世紀後半	子□人	体部外面	回転ヘラ切、作りが丁寧
35	CKHHN-C 32 A	須恵器	蓋	8世紀後半	申	体部外面	
36	CKHHN-E 029	須恵器	蓋	9世紀前半	舎	底部	回転糸切
37	CKHHN-C 25 B	須恵器	蓋	8世紀後葉から9世紀初頭	□（申？）	体部外面	

る。つまり、二文字ではなく一文字の漢字と解釈される。墨書土器に書かれる文字の中には二文字であっても文字同士の間隔が狭く、さらには接している場合も見受けられる。しかし同時に出土した他の墨書土器からそういった文字は確認されていない。この文字は 1 文字であろうことが推測される。なお、「万」の異体字も含め則天文字などをはじめとする異形の文字は仏典などを介し、非日常的な文字として理解され土器に墨書されたという可能性を三上氏は提示している。山形県内の類例を示すと長井市の台遺跡や川西町の道伝遺跡で確認されている。なお、「缶」に対して「大」の横棒部分が 7 のように墨痕が薄くなったために確認できないのではとの指摘が出来そうだが、その他の筆跡が明瞭であることから一筆のみが薄くなるとは考え難く、そういった観点からも「缶」という文字であるといえるだろう。

ここまで大山とされた墨書土器の検討を行った。また、この二点以外で「大山」もしくは「大山郷」と類似もしくは判読できる墨書土器は確認できなかった。なお、7 に関しては全体的に墨痕が薄く判断できない状況であったことから郷名が書かれていたことを否定することはできない。そのうえで、河北町南域で調査された当該期の遺跡に目を落としてみると、月山堂遺跡からは私印と考えられる遺物が出土しているうえ、熊野台遺跡では須恵器の甕に「大刀自」という刻書がされた遺物が出土している。報告書によれば、酒造りに関する文字とされているが、十川氏によると「刀自」は里長や郷長の妻などを示す言葉であり、有力者がいたことを示すものと解釈できるとのことである。さらに不動木遺跡では 8 世紀後半でも古い様相をもつ須恵器が出土している。また、内陸ではあまり見かけない三耳壺も出土している。この遺物は庄内地方などで出土する機会が多いことから、河川を利用した内陸と庄内との交流が考えられる。そのような環境を考えると 9 世紀段階において、出羽国内の地方行政区画としてこの地域が成熟していたと考えられる。また、8 世紀後半の須恵器などもみられることから古代におけるこの地域の開発はその時期から行われていたと考えられる。また、その時期にどの郷に属していたか大山郷も含め再度検討する必要がある。

5 まとめ

ここまで畑中（一の坪）遺跡から出土した墨書土器について出土地点や墨書の内容、書かれた土器について再度確認と検討を行った。まとめると墨書が書かれた土器は 8 世紀後葉から 9 世紀中葉にかけて製作された須恵器が主であり、土師器は 1 点のみである。出土遺構はいずれも明確ではないが、多くの墨書土器を出土した C 地点においては溝や河川が有力視される。D 地点・E 地点出土の墨書土器は同じ地点から竪穴建物などが検出されていることから住居も含めた比較的地盤が安定し、生活域とした場所からの出土とみられる。C 地点と、D・E 地点では墨書土器の存在する意味が違う可能性がいえ。文字には字の小さいものと大きいものの 2 種類が存在し、書かれた時期によって文字の大きさが異なることを指摘できた。また、山形県史などに掲載された「大山」と墨書された土器に対して一定の見解を示せたのではないかと考える。これらが今後の研究に少しでも寄与できれば幸いである。

最後に本論に関わり三上喜孝氏から多くの御助言を頂いた。お忙しい中、対応頂いたことに感謝を申し上げます。また、河北町教育委員会には貴重な遺物にも関わらず、貸出して頂いたうえ、観察のためとはいえ水漬けまでさせて頂いたことに感謝を申し上げます。

参考文献

- 河北町教育委員会 1981 『畑中（一の坪）遺跡発掘調査報告書』河北町埋蔵文化財調査報告書第 2 集
 河北町教育委員会 1982 『月山堂遺跡発掘調査報告書』河北町埋蔵文化財調査報告書第 3 集
 (財) 山形県埋蔵文化財センター 2007 『庚檀遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書台 161 集
 十川陽一 2017 「律令国家—地域的特質についての基礎的考察」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第 18 号
 長井市教育委員会 2015 『台遺跡発掘調査報告書』長井市埋蔵文化財調査報告書台 37 集
 平川南 2007 『墨書土器の研究』吉川弘文館
 文化財保護委員会 1966 『全国遺跡地図（山形県）』
 三上喜孝 2023 「墨書土器とは何か」『墨書土器と文字瓦』八木書店
 山形県 1982 『山形県史 第一巻 原始・古代・中世編』高橋書店
 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 2013 『山形古代史発掘 40 年』開館 20 周年記念企画展図録
 山形県教育委員会 1980 『熊野台遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財報告書第 31 集
 山形県教育委員会 1986 『不動木遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財報告書第 100 集